



Title	宝暦期艶書小説の展開：『新にしき木物語』の再検討をととして
Author(s)	岡部, 祐佳
Citation	語文. 2022, 116-117, p. 28-40
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90787
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

宝暦期艶書小説の展開

——『新にしき木物語』の再検討をとおして——

一 はじめに

仮名草子『薄雪物語』（慶長頃古活字本、寛永九年（一六三二）整版本刊）は、近世を通じて広く読まれた書簡体（艶書）小説である。艶書文範あるいは女性向けの教養書としても巷間に親しまれたこの作品は、その後いくつかの改作作品を生むこととなる。

ひとつめの改作は『新薄雪物語』（正徳六年（一七一六）、以下『新薄雪』と称す）である。『新薄雪』は、『薄雪物語』において人妻だった薄雪の設定を、「物のあはれを十分に知りながら、亡夫に義理を立てて三年の喪に服して後、はじめてうちとけて逢ひそめるといふ理智的な賢女型」の女性へと変更している点に特徴がある。また、菊池真一氏によれば、『薄雪物語』よりも筋の展開が合理的になっており、啓蒙性・実用性・教訓性が強化されていることも、『新薄雪』の特筆すべき点といえる。²⁾

本稿で主に検討するのは、この『新薄雪』をさらに改作した『新

岡 部 祐 佳

にしき木物語³⁾（以下『新にしき木』と称す）という作品である。本書は、宝暦八年（一七五八）に江戸の山崎金兵衛が刊行した浮世草子で、寛政頃には上総屋利兵衛による後印本や、上総屋利兵衛・万屋太治右衛門・八文字屋八左衛門による後印本が刊行されている。また、文政年間には、南仙笑楚満人（二世）、すなわち為永春水の序⁴⁾が付された後印本も出るなど、近世後期に江戸を中心に繰り返し刷られた作品である。

市古貞次氏の、「『新薄雪物語』と筋が全く同じく、人名地名をかえたのみのもの⁵⁾」という説明が端的に示すとおり、本作はこれまで改作というよりも剽窃に近い扱いをされてきた。しかし、『新薄雪』と『新にしき木』を読み比べてみると、両者の間にはいくつか大きな違いがあることが確認できる。

まず一点目は、市古氏の指摘にもある、地名・人名の変更である。男主人公の名が園部の右衛門から園多もんへ、女主人公は薄雪から錦木へ、そして仲立ちがまがきから通路へと名前が変わっ

ている。また、園ゑもんが錦木を見初める場所が、清水から浅草上野になるなど、地名が京都のものから江戸のものへと変更されているが、これは『新にしき木』の出版地が江戸であることによるものであろう。二点目は結末部分の変更である。市古氏が指摘するように、たしかに『新にしき木』の本文は『新薄雪』とほぼ同一である。しかし、物語の結末部分には大幅な改変が認められる。三点目は、『新薄雪』に見られた散らし書きの版面や和歌の出典表記が削除されていること、そして四点目は挿絵が全て差し替えられていることである。

本稿では、『新薄雪』から『新にしき木』への改変点に着目し、その意味を検討する。また、同時期に刊行された『時勢花の枝折』（以下『花の枝折』と称す）との比較をおして、宝暦期に艶書小説が辿った展開を明らかにすることを目指す。

二 結末について

『新にしき木』の本文は、そのほとんどが『新薄雪』の本文をそのまま流用したものとなっているが、作品の結末部分には大幅な改変が加えられている。

まず、典拠『新薄雪』の結末は以下のとおりである。⁽⁶⁾

諸共に涙を止め、とやかくしつらひ、その明るる日の暮方に
鳥辺山の煙となし、

思ひかね詠しかども鳥辺山果ては煙も見えずなりにき

詞花

右衛門は暇申て帰り、すぐに清水へ詣で、去年の願ひを掛けて叶ひしも一夜の夢の心地して、楽しみ極りて悲しみを生ずる憂世の例、今身の上に思ひ知られ、名号を唱へ、その夜は通夜して少し微睡むと覺しに、薄雪ありしまゝの姿にて内陣より出らるゝを嬉しく思ひ、夢心に起きて立ち寄りんとしければ、観世音にて御座します。(中略)右衛門夢覺め驚き、「さては救世菩薩の慈悲の積もりの薄雪にて、日陰待つ間の朝顔の花の姿を現して、徒なる世ぞと知らすべき方便ならん。」と、ありがたさ心の底へ通り、歎喜の涙ながらに伏し拝み、下向して深草に帰り、召使の者に暇を取らせ、手づから髻切りて墨の衣に身を俏し、名を夢半と改め、東山に庵を結びて、明け暮れ念仏して、薄雪の跡を弔ひて、(中略※引用者注…)尼となつた腰元まがきとの問答」と色々の物語にて、日も山の端に傾きければ、まがきの尼も暇申て帰りける。それより後、夢半は高野の山に詣で、薄雪為に書きし法華經を納め、又ある時は西国巡りし、明け暮れ念仏三昧の身となり、廿六歳の秋の頃めでたき往生遂げられしとかや。煩惱即ち菩提とは、かゝることをや申べき。ありがたかりし例也。

このように、『新薄雪』の結末は、薄雪の死後、悲しみに暮れる右衛門の夢に、観音の姿となつた薄雪が現われ、彼を仏道へ導くという、仏教色の強いものとなっている。

これに対して、『新にしき木』の結末部分は以下に示すとおりである。

もろともになみだをとめとやかくしつらひ、そのあくる日のくれかたにけふりとなしける。とおもひしはゆめにて、目さめおどろき、にしき木姫をゆりおこしてありし夢のものがたりしければ、ふしきや姫もおなじ夢を見侍るよし、「まことくわんぜをんのほうべんにて、さだめなき世の中をさとらしめんとの御事ならんありがたさよ」とふしおがみければ、はやしの、めのとりこのゑ、夜はほのくくと明ぬれば、一間のうちより姫の母の御かた、しまだいにづるかめのかざりもちいで給ひの給ふやう、「かねてより園ゑもんどの御事は、めのとにつけをきしかよひ路がものがたりにてき、およびしが、姫をことのふふびんにおもはれし御事ひとかたならぬゑにしなければ、けふはさいじやうき日りやうしんとて、こんれいのぎしきとりむすばんとおもひはべる。みなくもよろこび給ひてん」との給ふにぞ、おのくいしやうをあらたむれば、はやしはいなみしづかにて、とうたひてよろこぶ。いちもん一家ひらくれば、天下のはるのめでたさ、よろこひによるこびをかさねるさんくくど、こんくのをさまるくのいなををし、いろに色そふときわ木の、かわらぬいろのまつが枝に、むめかえつとふうぐひすや、山とりのをのなかくと、長閑なりけるはつはるの、夜となくひるとなきなぐさみになりてしと、つたなき筆に此ものがたりかきつゝりしは、なんばうおもしろきものがたりにて候。

改変部分（波線部以降）を見ると、『新にしき木』では女主人公の

死とそれに伴う男女の離別が、すべて諸行無常を悟らせるために観世音が見せた、方便の夢物語とされていることがわかる。そして、夢から覚めた園ゑもんとにしき木姫は、周囲の祝福を受けてめでたく結婚する。改変の内容自体は安直な大団円であり、特段優れたものとは言い難い。しかし、艶書小説の流れの中に本書を置いたとき、この改変はひとつの意味を持つこととなる。

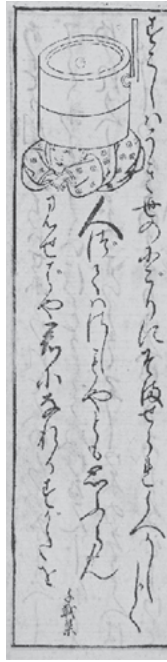
『薄雪物語』以来、とくに男女の主人公を設定した物語形式の艶書小説には、仏教的色彩を色濃く残す系統が存在していた。その流れは『新薄雪』にも受け継がれていたが、その三年後に刊行された『当流雲のかけはし』⁷⁾（享保四年（一七一九）刊、以下『雲のかけはし』と称す）では仏教性が薄れ、「女大学」的な儒教の価値観を反映するようになる。その結果、作品の末尾も、出家遁世を促すものから現世での大団円を描くものへと変化する傾向が見受けられる。例えば『雲のかけはし』巻五では、「神をたのみず、我こそをたゞしくして道をまも」つた後家おそなの行為が家を繁栄へと導き、彼女に懸想していた男が「みちのまことに立かへ」る様子が描かれている。また、『薄紅葉』（享保七年（一七二二）刊）においても、男主人公が女主人公の家に婿入りし、女の弟を跡目に立てることで、七代続いた家系を存続・繁栄させたという結末が描かれているのである。

このように、次第に仏教性が薄れていく享保期以降の艶書小説では、家の存続・繁栄といった結末を採用するようになる。『新薄雪』の仏教的な結末を、婚姻による大団円へと変更した『新にし

き木』のありようは、この流れを汲むものであるといえよう。

この変化の要因としては、読者層の拡大ということが予想される。俗世を捨てて仏道に入る高尚な結末よりも、現世においてめでたく大団円を迎える結末のほうが、より広い読者に理解されやすかったであろうことは想像に難くない。実は『新薄雪』にも、三社託宣の趣向を取り入れたり和歌にコミカルなイラスト（図1）を添えたりといった、通俗的な趣向が凝らされていた。『新にしき木』はそれらを残しつつ、さらに結末部分をわかりやすく変更することで、より大衆的な読み物を目指したと考えられる。

【図1】『新薄雪』 卷三八ウ



三 散らし書きの削除

典拠である『新薄雪』は、散らし書きの版面を有する作品であった。これは『新薄雪』が刊行された時期に起きた女筆手本ブームの影響を受けたものであり、『雲のかけはし』や『薄紅葉』といった同時期に刊行された艶書小説にも、散らし書きの趣向が取り入れられていた。そしてこれらの作品にみえる散らし書きは、読者

の女性たちに女筆の手本を示すという、啓蒙的な意義を持つものであった。⁹⁾ところが、『新にしき木』はこの散らし書きをすべて削除し、並べ書きに改めてしまっているのである。

そもそも散らし書きは、和歌や女房奉書に用いられた書法であり、雅文化に属するものである。そして先に述べたとおり、享保期には女筆手本が数多く刊行され、主に上中層町人階級の女性たちを対象に、散らし書きが教養として提供されるようになった。

しかし、時代が降るにつれて、往来物や用文章はより日常的な実用性を重んじるようになっていく。天野晴子氏は、女子用消息型往来における散らし書きについて、次のように述べている。¹⁰⁾

むしろ、本文の文体が散らし書きから離れて、読み易くまた書き易い平易な文章・文体になるに従って、こうした「散らし書き」が別に付されていく傾向にある。（中略）従って、付載記事としての「散らし書き」は、消息型往来において、本文の日常の必要性と結びついた手習い教育に加え、それよりも高度な書道教育内容が教養的な意図をもって盛り込まれていったと考えられる。

また、小泉吉永氏も「江戸中期以降、女用文章から散らし書きが消えていく中で、装飾的・補助的に掲げられた散らし書き消息は貴人の手紙の場合が多く、散らし書きが庶民の実生活からかけ離れた存在になっていたことを思わせる」と指摘している。¹¹⁾つまり、時代が下り読者層が拡大していくにつれて、散らし書きは一般人々にとって縁遠い存在になっていくのである。そのような状況

になると、低いレベルの教養しか持たない読者は、散らし書きを書くことはおろか読むことさえも難しくなってきたであろう。

前節で述べたように、『新にしき木』は『新薄雪』よりも通俗的で大衆的な読み物へと作り替えられていた。この特徴に鑑みれば、高度な教養よりも「わかりやすさ」のほうが重視されるのも頷ける。典拠の特徴であった散らし書きが削除されたのは、『新にしき木』が、より教養レベルの低い読者を想定していたからではなからうか。

四 挿絵について

『新にしき木』巻一の挿絵は、園ゑもんがにしき木姫を見初める場面と、花見をする姫に園ゑもんが短冊を贈ろうとする場面が描かれており、本文の内容に即したものとなっている。しかし、巻二・五の挿絵は、婚礼・出産・宮参りなどの様子を描いており、同時に示される本文の内容とは一致しない。なぜ『新にしき木』にはこのような挿絵が付されているのだろうか。

第一に考えられるのは、本稿第二節で確認した結末部分の改変の影響である。巻二・五の挿絵は、同時に示される本文の内容との関連性は薄いものの、にしき木姫と園ゑもんが結婚するという結末との親和性は高い。しかし、本文には二人の間に子が生まれたといった記述はないため、出産や宮参りの絵については未だ不審が残る。本文との関連が認められない以上、必然的に作品内容とは別のところに、この挿絵の意味を見出す必要が生じてこよう。

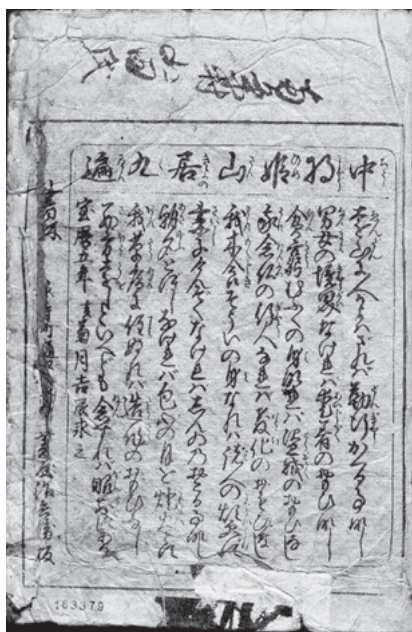
そこで目を向けたのが、当時の女子教育との関連である。

天野晴子氏によると、近世の女子用消息型往来では、「一生に關する題材は、出産と婚礼が江戸時代全期を通じてきわめて高い比重で占められている。ことに江戸時代後期に至ると、一冊の往来の中でもきわめて詳細な場面ごとの文例が用意されるものもでてくる」ようになる。すなわち、婚礼や出産は、当時の女性たちの中で重要な位置を占めていたということになる。これはおそらく、当時の女子教育が「集権的な封建体制のもとで家族制度の存続・強化がはかられたところから、(中略)主婦のあるべき姿を、その精神的な基盤とともに教えこむこと」を主流としていたことに起因するものであろう。

こういった当時の女子教育のありようが、文芸に与えた影響も少なくない。例えば、小谷成子氏は赤本『鼠の嫁入』について以下のように指摘している。¹⁴⁾

以上から再び『鼠の嫁入』に目を移してみると、それは幼女向きに、動物の世界をかりて女性の教育を示している書といえる。(中略)又、この書に筋らしいものがないことは、昔咄を素材とした他の赤本とは異質の意味が含まれていたことを示すものである。即ち、成人女子教育の書にあっても約半分の量を占める結婚、出産という女性の一大事を知らしめるといふ実際の教育的意義を担っていたからこそ、筋は不要なのであった。

小谷氏によれば、赤本『鼠の嫁入』は、「文章とよぶようなものは



【図2】『女訓用文都錦』末尾

なく、各々の鼠達が話しあっている詞が書込んである」のみで、「男女の鼠が見合いをし、結納を交わして婚札する。その後、子供が生まれて宮参りをする絵」で構成されている。婚札や出産が女子教育の中で重要な位置を占めていた近世においては、そのような絵自体が一種の教育的な意義を担っていたのである。

これを踏まえて『新にしき木』の挿絵に目を戻してみると、それは男女の出会いから婚札、出産、そして子どもの宮参りまでという、女性の一生の中でも重要な行事を描いたものであることがわかる。『新にしき木』の挿絵もまた、『鼠の嫁入』の絵と同様の教育的意義を担っていた可能性が浮上してくるのである。

ここで、如上の考えを補足するものとして、『女訓用文都錦』という書物の絵と『新にしき木』の挿絵との関連性を指摘したい。

『女訓用文都錦』は、京都の菱屋治兵衛が刊行した女子用往来で、『往来物解題辞典 解題編』（大空社、二〇〇一年）には「宝暦五年（一七五五）刊（求板）」とある。¹⁶この刊年はおそらく、巻末の「中将姫山居九遍」という記事の最後に、「宝暦五年亥菊月吉辰求之」とあることから判断されたものであろう。しかし、【図2】を見ればわかるとおり、この文言は「中将姫山居九遍」の四角囲みの中に記載されている。したがって、これはあくまで「中将姫山居九遍」を求めた年月でしかなく、書物自体の刊行年月とは断言できない。明和九年刊書籍目録に掲載されていることから、宝暦五年九月から明和七年の刊行と見るのが穏当であろう。

この『女訓用文都錦』の冒頭には、結納の式・嫁入道具・嫁入・祝言献立・祝言座敷・色直し・部屋見舞・婿引出物・懐妊の帯・若子宮参りなど、婚札・出産に関する絵と説明文が掲載されている。そのうち、結納の式・祝言座敷・色直し・部屋見舞・婿引出物・懐妊の帯・若子宮参りの絵が、『新にしき木』巻二・五の挿絵とほぼ同じものとなっている（別表1）。また、『新にしき木』巻二・五丁表は、『女訓用文都錦』の祝言献立の絵の左半丁分と、『新にしき木』巻五・六丁裏は、同じく右半丁分と一致する（別表2）。以上のことから、『新にしき木』の挿絵が女子用往来と高い親和性を持つものであることは明白である。

本文の分量や内容から見ても、『新にしき木』の読者は『鼠の嫁

入」のそれよりも年長であろう。しかし、結末の通俗性や散らし書きの削除といった特徴に鑑みれば、『新薄雪』よりはやや低い教養レベルの人々を讀者として想定していたと考えられる。本書の本文にそぐわない不自然な挿絵は、そのようなレベルの女性たちに、婚礼や出産といった生活に密着した実用性の高い知識を示すために、あえて組み込まれたものではなからうか。

五 宝暦期艶書小説の傾向

さいごに、以上に検討してきた『新にしき木』の特徴を、同時期に刊行された艶書小説『花の枝折』と比較することで、宝暦期に艶書小説が辿った道筋を明らかにしたい。

『花の枝折』は、大坂の吉文字屋から刊行された、白話小説を原案とする浮世草子である。本書卷一・二のほとんどが恋文のやり取りで構成されているため、艶書小説に分類することができ。初版と目されるもののほかに埋木による改変を施した諸版が複数あるが、本文の改訂に逆行して奥付の年次が遡るという奇妙な現象が指摘されている。⁽¹⁸⁾ 如上の理由からか、先行研究でも刊記について複数の説が行われているが、宝暦十二・十四年（一七六二・一七六四）の間に刊行されたことは間違いない。また、明和六年（一七六九）刊『絵本婚礼手引草』付載の「女可翫書目録」にその名が見えることや、『敵討天神利生記』（明和六年刊）・『滅多無性金儲形氣』（安永三年（一七七四）刊）などに付される吉文字屋蔵板目録に、「女の恋哥をみだりならざるやうにもののがたりになし

ておもしろく哥の道をもしるやうに書たるなり」とあることから、主たる読者が女性に想定されていたことがわかる。⁽¹⁹⁾ すなわち、本書は『薄雪物語』から『新薄雪』、『雲のかけはし』、『薄紅葉』、そして『新にしき木』へと至る、女性向け教養書としての側面を有する艶書小説の流れに属するものと言える。

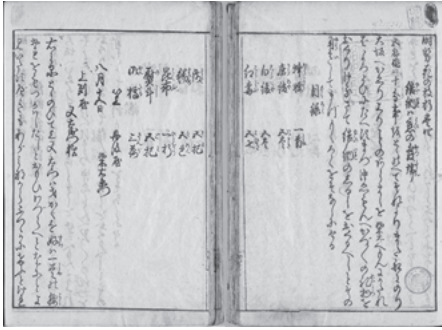
本稿第二節でも述べたとおり、享保期以降の艶書小説では、次第に出家通世ではなく家の存続・繁栄という結末を採用するようになる。そして、その流れを受けた『新にしき木』は、『新薄雪』の結末を男女主人公の結婚という大団円へと変更していた。それでは、『花の枝折』の結末はどのようになっているのであろうか。以下の引用を見ればその傾向は一目瞭然であろう。⁽²⁰⁾

（前略）久右衛門はよろこびて、御役人様の御慈悲をかんじたまつり、主水を阿波へつれくだり、むすめ蘭女にめあわせぬ。主水か古主人き、およばれ、すへくやくに立べきものなりとて、先知にて帰参おふせ付られ、にしきをきて故郷へかへり、もつはら忠義をはけみしかは、したひに御かぞうおふせつけられ、夫婦たがひに道をまもり、連理のちきりあさからず、男女あまたの賢子をもうけて、次第に立身さかへゆくすへこそめてたけれ。

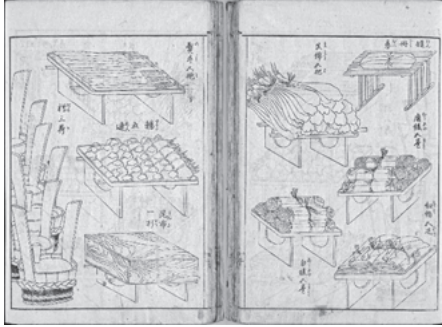
阿波の富豪富田屋久右衛門の娘お蘭を娶りたいと考えた丹波屋伝左衛門は、いとこの吉田主水を替え玉に仕立てる。家が没落し伝左衛門の元に居候の身であった主水は、替え玉の依頼を断ることができず阿波へと向かう。儒学・詩歌に秀で容姿も優れていた主

水を氣に入った久右衛門は、お蘭の婚姻相手を主水に決める。親類との顔合わせのため、再び阿波へと渡った主水であったが、荒天のため帰阪できず、そのままお蘭との婚儀が執り行われてしまう。その後、替え玉が露見し裁判となり、主水とお蘭を正式な夫婦とする判決が下る。お蘭と結婚した主水は、旧主に召し抱えられて忠義を尽し、多くの賢子を設けて出世した。

【図3】
『花の枝折』（巻四1オ～1ウ）



【図4】
『花の枝折』（巻四5オ～5ウ）



以上の主水とお蘭の婚姻をめぐる一連のストーリーは、原拠である白話小説をほぼそのまま踏襲したものである。⁽²⁾しかし、結末が俗世を捨てて出家する価値観ではなく、現世における家の繁栄を重んじる価値観に拠っていることには疑いの余地はない。

また、本稿第四節では『新にしき木』の挿絵が有する教育的意義を指摘したが、これに類似する現象が『花の枝折』にも確認できる。それは、【図3】に示した結納品の目録と、【図4】に示した結納品の図である。この【図3】【図4】は、お蘭との婚礼が決まった後、伝左衛門が富田屋へ結納品を送る場面に見られるものであり、話の展開に沿って示されている点が『新にしき木』とは異なっている。しかし、この目録と絵が『新にしき木』の挿絵と同様に、読者へ婚礼に関する知識を授けるといいう、教育的な役割を担っていたことは明らかであろう。

以上のことから、宝暦期の艶書小説では、物語の展開と作中の教養的知識の内容が、より通俗性・大衆性を強めているということがわかる。これは、時代が下るにつれて起こった識字層の拡大に対応して、そこに新たな読書を求めたゆえと考えられる。

なお、『新にしき木』と『花の枝折』には、散らし書きの有無という違いがある。本稿第三節で述べたとおり、『新にしき木』は典拠の散らし書きをすべて並べ書きに改めている。いっぽう『花の枝折』は、巻一～二に散らし書きの書簡を複数掲載している。この差異は、両書の重視する教養の違いによるものと推測される。すでに確認したように、散らし書きは次第に実用性とは切り離

され、より高度な教養と見なされるようになる傾向があった。また、『新にしき木』では掲載歌の出典が明記されないのに対し、『花の枝折』では『新薄雪』と同じく和歌の出典を示す傾向がある。以上のことから、『花の枝折』が『新にしき木』に比べて、雅文化に關する教養を、より積極的に取り入れようとする傾向にあったことは明らかである。

『新にしき木』と『花の枝折』は、どちらも大衆向けの教養書兼読み物を目指しつつも、前者が実用性や通俗性に重きを置いたのに対し、後者は雅文化を取り入れた、より典雅な教養書を志向していたことができる。

六 おわりに

本稿では、『新薄雪』から『新にしき木』への改変についての考察や『花の枝折』との比較をとおして、宝暦期艶書小説の特徴を論じた。その結果、女性向け教養書としての側面を併せ持つ近世の艶書小説が辿った、通俗化・大衆化という一つの道筋が浮かび上がってきたように思われる。

市古貞次氏が、『薄雪物語』を「新しき表現をもち、かつ斬新なる趣向をとりあげながらも、その内容は陳套にしてとるに足らぬ²²⁾」と評したこと、あるいは暉峻康隆氏が、

近世初頭の実用的な「薄雪物語」に発し、貞享の「年八卦」を経て、元禄の「万の文反古」に至る三段階のうちに、見事に露骨なる実用性を揚棄して、それ自体の目的と機能をもつ

て人生に奉仕する一流の文学にまで成長してゐるのである。⁽²³⁾

と述べたことから明らかにとおり、従来の近世日本の艶書小説史（あるいは書簡体小説史）は、文学性の優劣という文学至上主義的な価値観の下に構築されてきた嫌いがあった。ゆえに、本稿が着目したような作品群は、「いづれも実用性に根ざす」『薄雪物語』の亜流で、文学としては第二義的なもの²⁴⁾として等閑に付され、その史の変遷の様相も見逃されざるを得なかったのである。

しかし、そもそも近世の文芸は、純粹な文学性・娯楽性のみによつてその意義を計ることができないものばかりではない。文学性や娯楽性の裏には何らかの実用的、啓蒙的、あるいは教訓的な要素が存在しており、それらは表裏一体である。徒らに文学性のみを称揚することは、作品の本質や同時代における意義を見誤ってしまう危険性をはらんでいるのである。ことに、艶書小説あるいは書簡体小説という、一つのジャンルの史の変遷を捉えるには、同時代の価値観や文化的背景を十分に考慮する必要がある。

市古・暉峻両氏の研究は網羅的かつ体系的で、現在もおお参考され続ける優れたものであることは間違いない。しかしそれとは別に、同時代文脈を加味した艶書（書簡体）小説史を構想することが、必要な時期にきているのではないだろうか。本稿は、如上の問題意識の下、近世日本の艶書（書簡体）小説史を再構築するための、具体的な試みの一つである。

注

- (1) 暉峻康隆『日本の書翰體小説』（越後屋書店、一九四三年）一〇五頁。引用に際して、旧字を全て新字体に改めている。
- (2) 菊池真一『薄雪物語』と『新薄雪物語』（『甲南国文』第三十号（一九八三年九月））。
- (3) 『新にしき木物語』の引用は、すべて架蔵本（上総屋利兵衛版）に拠る。
- (4) 木越俊介『江戸大坂の出版流通と読本・人情本』（清文堂出版、二〇一三年）収録の「付・資料紹介『新にしき木物語』南仙笑楚満人（二世）序文」に紹介と説明がある。
- (5) 市古貞次『艶書小説の考察』（『中世小説とその周辺』（東京大学出版会、一九八一年）。初出は『國語と國文学』昭和十二年一月号。
- (6) 『新薄雪物語』の引用は、菊池真一編『薄雪物語・新薄雪物語』（和泉書院、一九八三年）に拠る。
- (7) 『当流雲のかけはし』の引用は、石川巖編『江戸時代文芸資料4』（国書刊行会、一九六四年）に拠る。
- (8) 拙稿『当流雲のかけはし』の教訓性と娯楽性―おそなと腰元に着目して―（『上智大学国文学論集』五十五号（二〇二二年一月））。
- (9) 拙稿『享保期艶書小説の当代性―当流雲のかけはし』とその周辺―（『上智大学国文学論集』五十四号（二〇二二年一月））。
- (10) 天野晴子『女子消息型往来に関する研究―江戸時代における女子教育史の一環として―』（風間書房、一九九八年）第三章二節、三二六頁。
- (11) 小泉吉永『近世の女筆手本―女文をめぐる諸問題―』（金沢大学社会環境学科研究科・博士論文、一九九九年）補足「女筆手本類の浸透と歴史的特徴」十五頁。
- (12) 前掲天野著書、第四章一節、四〇五頁。
- (13) 石川謙・石川松太郎編『日本教科書大系 往来編（二五） 女子

- 用』（講談社、一九七三年）収録の、石川松太郎氏による解説・解題。閲覧に際しては方丈堂出版によるDVD-ROM版を用いた。
 - (14) 小谷成子「赤本「鼠の嫁入」とその意義―江戸時代の女子教育の流れの中において―」（『愛知県立大学 説林』（一九八一年二月））。
 - (15) 菱屋治兵衛は『新にしき木』の版元である山崎金兵衛と共同で、『女用紅葉の錦』（宝暦十三年（一七六三）刊）という女子用往来を刊行している（東書文庫蔵本のデジタル資料（DIG-TSHB-2258）を、新日本古典籍総合データベースにて確認した）。このことから、宝暦期に両書肆が商業上の協力関係にあったことがうかがえる。
 - (16) 『女訓用文都錦』の解題担当者は小泉吉永氏。
 - (17) 明和九年刊行書籍目録の末尾に、「明和七庚寅年輯 武村新兵衛寿梓」とある（『江戸時代書林出版書籍目録集成』三（斯道文庫書誌叢刊之一、井上書房、一九六三年）を参照した）。
 - (18) 『京都大学蔵 大惣本稀書集成』第一卷（臨川書店、一九九四年）の解題（担当者は山本秀樹氏）。
 - (19) 前掲『京都大学蔵 大惣本稀書集成』第一卷の解題に拠る。
 - (20) 引用は、前掲『京都大学蔵 大惣本稀書集成』第一卷に拠る。
 - (21) 丸井貴史「吉文字屋本浮世草子と白話小説」（『白話小説の時代―日本近世中期文学の研究―』（汲古書院、二〇一九年）。初出は『雅俗』十七号（二〇一八年七月））。
 - (22) 前掲市古論文。
 - (23) 前掲暉峻著書、一〇三―一〇四頁。
 - (24) 前掲暉峻著書、一〇九頁。
- ※脚注の記述を含め、作品や先行研究の引用に際しては、原則振り仮名を省略し、漢字は通行の字体に改め、適宜傍線を付した。なお、引用文中の句読点や「」は、引用元での有無にかかわらず、稿者が改めて付したものである。

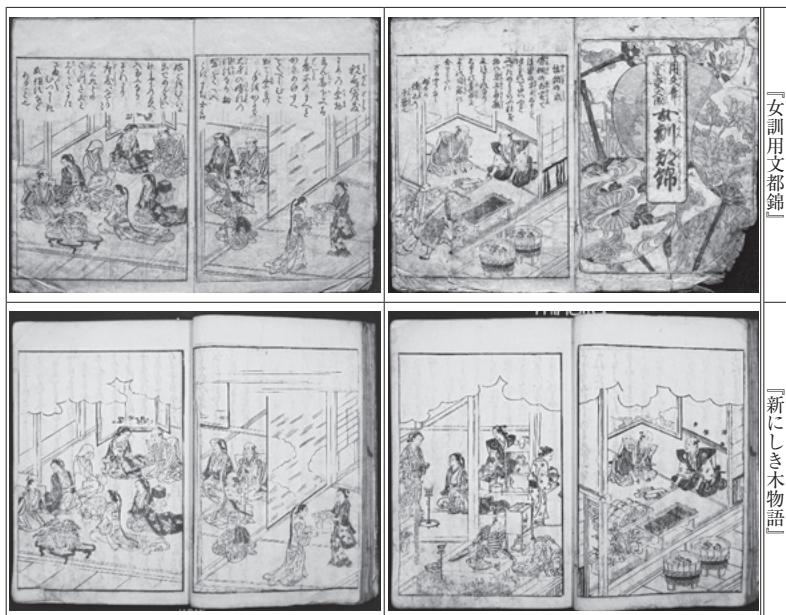
※画像の出典は以下に示したとおりである。

- ・『新薄雪物語』…国文学研究資料館鶴飼文庫蔵本 (Ogumi) を、新日本古典籍総合データベースより引用した(クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 ライセンス CC BY-SA)。
- ・『新にしき木物語』…架蔵本(上総屋利兵衛版)。
- ・『時勢花の枝折』…国立国会図書館蔵本(京大蔵)を、国会図書館デジタルコレクションより引用した。
- ・『女訓用文都錦』…東書文庫蔵本のデジタル資料 (DIG-TSHB-2261) を、新日本古典籍総合データベースより引用した(クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 ライセンス CC BY-SA)。

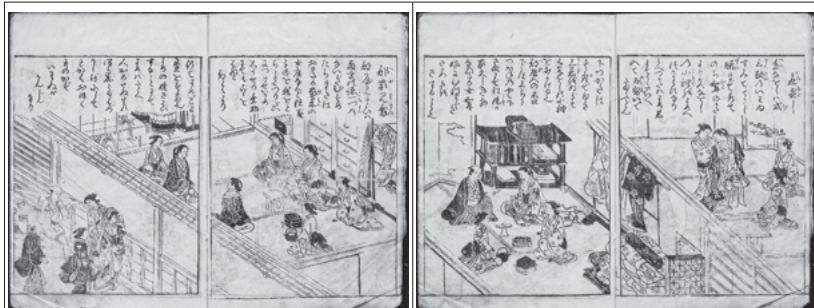
〔付記〕 本稿は、二〇二一年度京都近世小説研究会九月例会(九月十八日、Zoom)によるオンライン開催)における口頭発表に基づくものである。貴重なご意見を賜りました皆様に感謝申し上げます。

(おかべ・ゆか 本学大学院博士後期課程)

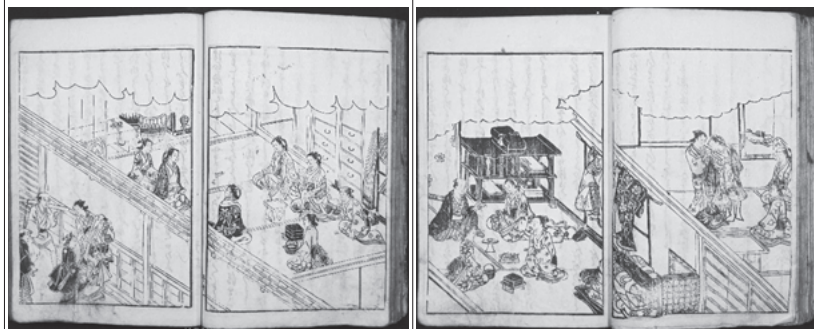
【別表1】



『女訓用文都錦』



『新にしき木物語』



『女訓用文都錦』



『新にしき木物語』

